



共通科目「国語」の 立場から

稲垣泰一

文芸・言語学系教授

第61号「日本語力を考える」を読んで、共通科目「国語」担当教官の世話人として驚愕を禁じえなかった。特に中には「日本語教育」と「国語教育」を混同した論旨で執筆されている方もいて、まことに遺憾の念を抱いた次第である。また編集の意図も奈辺にあるのか不明確であった気がする。

そもそも、本学は建学以来30年間、他大学に先駆けて共通科目「国語」を設置してきた。それは前号で多くの方たちが問われている、現在の学生たちの低下しつつある「国語力」を涵養するためであった。「自国語で正しい効果的な表現ができることは、指導的な地位にある社会人として必須の資格であるという見地」(林四郎ほか『共通科目「国語」設置の概要』1981)に立って、その理念を踏襲し、発展させるべく、今日まで共通科目「国語」に携わる教官たちは奮闘してきているわけである。前号の特集を読むかぎりでは、

そうした努力の歴史が、学内で何ら評価されていないかのごとき錯覚をもたらす文章も見られた。また、あたかも共通科目「国語」が現在の本学の教養科目として機能していないかの誤解を与えかねない文章もあった。この特集で「筑波大学年次計画」における共通科目「国語」の検討を実施したかの印象をもたらすリード文と編集後記にも納得がゆかない。全学的見地から何らかの発言をされる場合、少なくとも学内での教育の実態を正確に調査されたうえで、意見を述べるべきではなからうか。

もちろん、学生たちのいわゆる「日本語力」も含めた「学力低下」への問題提起そのものを否定するものではない。同じく「国語」を担当する石塚氏の提言や、伊藤氏の「共同規範性のゆらぎ」という観点にも共感する点も多い。ただ特定の教養教育と学力低下問題を直結させて論じ、それが当該の授業にたいする全学的な評価であるかのような印象を与える編集姿勢は、執筆者各位の意図とは反する方向に結果的に収束されてしまう危険性があり、厳に戒められるべきではなからうか。

(いながきたいいち 日本文学)

